

時代と人生を映す鏡としての *Mr. Vertigo*

大工原 ちなみ

Paul Auster は、従来、*New York Trilogy* や *Leviathan* などの作品で、彼が愛して止まない New York を中心に現代アメリカを描いてきた。そのような中で、1994年に出版された *Mr. Vertigo* は、1920年代のアメリカを舞台としており、年代設定という観点から言えば、きわめて異質の作品といえよう。更に作品の中には、1920年代に実際にあったチャールズ・リンドバーグによる大西洋ノンストップ横断飛行の成功やベイブ・ルースのホームラン記録達成などが描かれ、新しいヒーローが次々に誕生し、野球など娯楽が盛んになった明るい時代の様相と共に、禁酒法が布かれ、ギャングが暗躍し、KKK (Ku Klux Klan) が勢力を復活させるなど、暗く不寛容な時代の雰囲気も如実に描かれている。

またこの作品はファンタジー的な要素も強い作品である。主人公の回想録の形をとっているが、"I was twelve years old the first time I walked on water." (3) という、水上のイエスを想起させられる書き出しにいきなり戸惑いを覚えるように、空を飛ぶことが出来た、文字通り "Walt the Wonder Boy" の少年 Walter Claireborne Rawley が、師匠となる Master Yehudi に見出され空を飛ぶことができるようになるまでのストーリーに物語の大半を割いている。このフィクション性が高い部分と歴史的事実が、せめぎ合いながら人間が空を飛ぶという世にも不思議な物語を、あたかも実在の人物が書いた自伝のように読ませてしまうのである。

この論文では、Paul Auster がなぜ、現代アメリカではなく20年代のアメリカに舞台を設定したのか、その意図を考慮しつつ、まず1920年代のアメリカについて、3つの要素に分けて概観し、作品に描かれた20年代と符合させてみたいと思う。

1. 不寛容の時代

1920年代は、第一次世界大戦後の経済不況を引きずる形で、不況で幕が開けている。22年から徐々に復興が始まり、大半の人々が消費主義の時代を謳歌できるようになったが、それも29年の大恐慌によって幕が引かれる事になる。しかもテクノロジーの恩恵と消費社会の幕開けで、車や電化製品が一般の労働者の手の届くところとなったため、その分かえって、依然として貧しくその恩恵に浴せないでいた、零細農民や斜陽産業の労働者、スラムの住人である有色人種たちとの貧富の差は拡大する。

Mr. Vertigo の主人公である Walt も9歳で Master Yehudi に見出されたとき、「セントルイ

スの通りで小銭を物乞いする孤児」(3)であった。父は1917年にベルギーで毒ガスを浴びて戦死し、一回一ドルで春をひさいでいた母は、狂った警官に撃ち殺されて、4年半前に亡くなっている。彼には一応血縁関係にある Peg 伯母とその連れ合いの Slim 伯父がいたが、貧しい上に、甥に対する愛情もなく、家に住まわせてもらっているのがやっとという状況である。Master Yehudi からも、"You're no better than an animal," とか"a piece of human nothingness." (3) と見下される Walt は白人ではあるものの、スラム街の浮浪児であり、社会の底辺をなすいわゆる Poor White であったといえよう。

このように多くの白人が貧困から抜け出せないでいる中、1915年にアトランタ在住の福音伝道師で保険のセールスマンでもあった、ウィリアム・J・シモンズの手で再建された WASP の優越性を掲げる白人の秘密結社である Ku Klux Klan が20年代に入って勢力を伸ばしていく。南北戦争後、南部諸州に結成された KKK が黒人や北部人をターゲットとしていたのに対して、Invisible Empire として復活した第二次の KKK は、対象を黒人だけでなく、ユダヤ人やカトリック教徒、移民へと広げている。この一見極端と見えるこの組織が掲げた移民反対と WASP 文化の純粋さを保つという理念は、ある意味でこの時代の精神を端的に示すものでもある。そしてそれは、歴史的には移民割当法の制定とサッコとヴァンゼッティ事件、及びスコープス事件として表れている。

クランのメンバーなど WASP の保守勢力は、アイルランドやイタリアからのカトリック教徒の移民、あるいは東欧やロシアからのユダヤ教徒の移民たちが、大挙して都市に住みついた事で、都市環境が悪化してスラム化し、既存の住民の仕事を奪い、また彼らの飲酒癖が悪い影響を与えていると考えた。この結果、1921年に緊急移民割当て法が制定されたのを皮切りに、1924年には国籍法が出され、そして更に1927年に厳しく改正がなされ、東欧・南欧からの移民はかなり締め出されることになった。しかし、プロテスタントが多いイギリスやドイツからの移民はさほど制限されることがなかったのである。

このように WASP 以外の移民に対する悪感情が高まっている中で、1921年のサッコとヴァンゼッティ事件は起こったのである。マサチューセッツ州で起きた強盗殺人事件で、Nicola Sacco と Bartolomeo Vanzetti という二人のイタリア移民が逮捕され、何ら証拠がないまま1927年に処刑されてしまう。確かに二人は無政府主義者ではあったが、イタリア系の移民でなければ、偏見のあまり偏狭になった判事の口から死刑の判決が出されることも、それで刑が確定してしまうこともなかったと思われる。アメリカの裁判史上有名なもう一つの冤罪事件であるローゼンバーグ事件の被害者であり、1953年に処刑された Rosenberg 夫妻がユダヤ系というやはり WASP 以外のマイノリティに属することも決して偶然ではなからう。

Mr. Vertigo の場合、1924年に、Master Yehudi の空を飛べるようにしてやるという誘いに乗って彼の家に辿り着いた Walt は、そこで擬似家族を持つことになる。Master Yehudi

を父とし、ネイティブ・アメリカンの Mother Sioux を母とし、兄はアフリカ系アメリカ人の Aesop である。この家族をつぶさに見ていくと、Master Yehudi は父も祖父もラビという敬虔なユダヤ人の家系でブダペストに生まれ、幼いうちにアメリカに移住し、ブルックリンに育ったという経歴のハンガリー出身のユダヤ移民である。また Mother Sioux は、Sioux 族の酋長で、1876年の Little Bighorn の戦いで、Custer 将軍が率いる第7騎兵隊を全滅させたことで有名な Sitting Bull の兄弟を祖父に持ち、彼女自身、娘盛りの頃には、Buffalo Bill の Wild West Show の花形騎手だったというネイティブ・アメリカンの悲劇と栄光を史実に則して全て體現しているような人である。また兄の Aesop は、母親に死なれて二日間何も食わずに、ジョージア州の綿花畑をぼろを身にまとって這いずり回っているところを、Master Yehudi に救われた黒人の子という設定になっている。以上のようにこの擬似家族は、ユダヤ人・インディアン・黒人という、KKK の格好の攻撃対象から構成されているのである。

いきなり多文化主義的環境に放り込まれた Walt だが、当初は Mother Sioux や Yehudi をジプシーと考えて見下し、Yehudi から新しい兄の Aesop と握手するよう促されたのに対して、"I ain't shaking hands with no nigger." (13) と拒絶する人種差別主義者であった。これは当時の白人社会に広く浸透していた偏狭さや不寛容の時代精神をよく示しているものともいえよう。これに対して、Master Yehudi は力尽くでわからせた挙句、"All men are brothers, and in this family everyone gets treated with respect. That's the law." (13) と、この家族内では、皆が平等であり、人種的差別があってはならないことを宣言する。ユダヤ人・黒人・インディアン・(貧乏) 白人とそれぞれ異なる、しかもマイナーなエスニシティからなる擬似家族を維持するためには、この法 (Yehudi がユダヤ人であることを考慮するなら、律法といったほうが適切かもしれない) が、絶対に不可欠である。また多民族国家としてのアメリカが、この家族に凝縮されて表現されていると考えるなら、家族にとってこの法が不可欠なと同様に、国家としてのアメリカにも平等を定めた法が必要であり、しかも単に法があるだけでなくその法の精神が遍く人々の間に浸透していることが肝要であることをユダヤ人である筆者は訴えていると考えられよう。

しかし表面的には服従したものの、Walt の Aesop に対する差別意識は変わらなかった。

The only one who showed me any genuine kindness was Aesop, but I was against him from the start, and there was nothing he could say or do that would ever change that. I couldn't help myself. It was my blood to feel contempt for him, and given that he was the ugliest specimen of his kind I'd ever had the misfortune to see, it struck me as preposterous that we were living under the same roof. It went against the laws of nature, it transgressed everything that was holy and proper, and I wouldn't allow myself to accept it. (19)

Walt は理性というよりも、体の中を流れる血のために Aesop に対する嫌悪感をたぎらせていることがわかる。このことから当初、Walt が KKK とほぼ同様の差別意識を持っていたと判断できよう。また Walt には黒人と一つ屋根の下に暮らすことが、聖なるものへの冒瀆や宗教上の罪を犯すことになるという認識がみられるが、このことは、KKK が犠牲者の前で聖なる十字架を焼く儀式を行ったことからわかるように、差別と宗教の密接な結びつきを示唆するものであろう。

このように Walt が Aesop に対して嫌悪感を剥き出しにしても、Aesop が一向に気に介さないとわかる。「カンザス全体に魔法がかけられたか」、「悪夢の国へつれてこられたに違いない」と更に反発を強めるのである。しかしながら Walt の場合、擬似家族に対する偏見は徐々に解けていき、やがて深い愛情へと変わっていく。そこに至るプロセスには、生死をさ迷うほどの原因不明の病にかかった Walt を、昼夜付きっきりで看病し、ス一族の間に伝わる祈りの儀式までして病を治そうとしてくれた Mother Sioux の愛があり、自分に向けられた嫌悪と嫌がらせにもかかわらず、Walt に対して実の兄のような優しさを持って常に接してくれた Aesop の包容力がある。

こうして Walt の心から偏見は取り払われたが、マイノリティからなるこの家族を取り巻く周囲の状況は厳しかった。それを看破していた Master Yehudi は Walt に、"We have some powerful enemies around here, and they're not too thrilled by our presence in their country. A lot of them wouldn't mind if we suddenly stopped breathing, and we don't want to provoke them by strutting our motley selves in public." (25) と差別的な敵に周囲を囲まれ、いつ何時息の根を止められるか予想できないという危険性を説き、彼らから逃れるためには、"…the family has to lie low. The more invisible we make ourselves, the safer we're going to be." (25) というように、なるべく人種差別主義者らを刺激しないため、自分たちの存在をアピールしないようにすることだと教えるのである。1926年になり、春から夏にかけての日照りと9月の豪雨で作物が全滅し、農家が多大な被害を被ると、街に陰険な空気が漂い始める。Yehudi は、「財布がカラになれば、頭は怒りと淫らな想いで一杯になる」のであり、「彼らが自分のトラブルの責任を転嫁できる誰か」を見つけ始めたら、4人とも身を隠したほうが良いだろうと述べ、恐ろしい災難が家族に降りかかることを心配していた。結局 Book I の最後で、顔に白いシーツを被った KKK の襲撃を受けて、家に居合わせた Mother Sioux と Aesop が、燃え盛る家から引きずり出され、首に縄をかけられて木に吊るされて虐殺され、KKK の儀式に則り、家の前で木の十字架が燃やされる。

Master Yehudi と共になす術もなく身を潜めてこの様子を見ていた、Walt は、「太陽の爆発」あるいは「この世の終わり」(91) を目撃した思いがしたのである。後に残された二人の喪失感も大きかった。Yehudi は茫然自失の状態で、"I saw it coming, and I didn't lift a

finger to stop it. It's my fault. It's my fault they're dead." (95) と繰り返し述べ、危険を察知しながら、殺された二人のために何も出来なかった自分の無力さと二人の死に対する自分の責任を感じる。ここには、同じユダヤ人がホロコーストの犠牲になったのに、しかもナチスによる同胞たちへの残虐行為のうわさがアメリカにも流布し始めていたのに、彼らのために何もしてあげられなかったという、第二次世界大戦後、アメリカのユダヤ人たちが感じた罪悪感や後ろめたさに通じるものがあるだろう。

やがて、二人とも Aesop と Mother Sioux の死を乗り越えるが、Walt の空中浮遊術も上達し、アメリカの各地を公演して回っているうちに、Walt の心に、Yehudi の「生きている者には、死者を記憶する義務がある」という言葉と共に、亡くなった二人のことが思い出されてくる。"They're moldering in their graves is what, and the trash that hung them's still running free." (127) という発言からもわかるように、正義を實行すべく二人を殺した連中を探し出して復讐すべきだと言うのである。これに対して Master Yehudi は次の様に諫めている。

"We could track them down and bring them to justice, but that's the only job we'd have for the rest of our lives. The cops won't help us, I'll guarantee you that, and if you think a jury would convict them, think again. The Klan is everywhere, Walt, they own the whole rotten charade. They're the same nice smiling folks you used to see on the streets of Cibola – Tom Skinner, Judd McNally, Harold Dowd – they're all part of it, every last one of them. The butcher, the baker, the candlestick maker. We'd have to kill them ourselves, and once we went after them, they'd go after us. A lot of blood would be shed, Walt, and most of it would be ours." (127)

KKK のメンバーはどこにでも居り、笑顔で接してくれていた良き隣人たちも一人残らずクランのメンバーであり、警察や判事さえも、力になってはくれないと言うのである。Master Yehudi も指摘しているように、KKK のメンバーは一人一人取ってみれば、敬虔で道徳やプロテスタンティズムの守護者であり、善良な市民ですらある。しかしだからこそ人的偏見の根は深く恐ろしいのである。

彼らはまた聖書の教義を言葉どおりに解釈する福音主義に惹かれ、聖書を学校でも教えるように圧力をかけた。そして神がアダムとイブを創造し、人類は皆その子孫であると信じていたため、猿と共通の祖先から進化したとする進化論を公立学校で教えることを禁じようとする。この風潮の中で、1925年にスコープス裁判が開かれる。舞台となったのは、KKK の勢力が強かった南部テネシー州のデイトンである。テネシー州議会は、年頭に進化論を公立学校で教えることを禁ずる法律を定めていた。それを意識的に破った John Thomas Scopus という高校教師が、この法律に違反したかどで逮捕され裁判が開かれる。スコープスは裁判で有罪には

なったものの（州法を破ったことは確かであったため）、裁判の過程でファンダメンタリストたちの盲目的信仰の滑稽さと時代遅れが露呈される。しかしそれでも彼らは信念を変えようとはしなかったのである。

ここで更に考えさせられるのは、このような事象を1920年代に特有のものとして、過去の歴史的事実の断片として葬り去ることが出来ないということである。Austerが活発に作品を発表した世紀末の1990年代には、WASPの保守派の間で、ファンダメンタリズムが復活し、聖書ではなく進化論を教える公教育に対する反発から、学校を拒否したり、強姦や近親相姦も含めいかなる場合にも中絶に反対するキャンペーンを張ったり、KKKさながらの人種差別的な思想に染まり、アフリカ系の教会を焼き払う等極端な形で差別意識を露にする白人団体等も現れているのである。

2 娯楽とヒーローの時代

1920年代は時代から取り残された貧しい人々がいた一方で、テクノロジーの発展等もあって、工業生産・経済が発達し、第二の金ぴか時代とも言われるように消費主義文化が一般大衆の日常生活を支配していく。電気製品の普及などの恩恵を受けて余暇の時間が増えた分、人々は娯楽に金と時間をかけることが可能になった。そのため、次々と発刊された『リーダーズダイジェスト』や『タイム』等の雑誌を読みクロスワードパズルを楽しみ、ラジオでジャズやソープ・オペラに耳を傾け、友人たちと麻雀に興じ、映画を観て、T型フォードでドライブし、スポーツを楽しむといったライフスタイルになった。また、水着姿の美女たちを競わせるミス・アメリカのコンテストも1922年に始まるなど、安っぽいショービジネスが栄えた時代でもある。

Mr. *Vertigo* でも、主人公のWaltは自分のことを、"I was a city boy who had grown up with jazz in his blood" (14) と述べ、Jazz Ageの申し子であることを自認している。Witherspoon夫人がWaltを楽しませた方法も、フォード車をドライブして町に行き、アイスクリームパーラーやキャンディストアに寄り、映画を観たりゲームセンターで遊ぶことであり、当時の子供にとっては最高の娯楽であったと思われる。

この時代の特徴は、1927年にとりわけ凝縮された形で表されているように思われる。娯楽に関連する項目を列挙するなら、映画のトーキー化・ベイブ・ルースによるホームラン記録の樹立・リンドバーグによる単独大西洋横断の成功と次々と人々の心を魅了する出来事が起こり続けた年である。ちなみに、「1. 不寛容の時代」のところでも言及した、サッコとヴァンゼッティの死刑が執行されたのもこの年である。

a 映画

この年は映画で言えば、映画芸術科学アカデミーが創設され、初代会長にフェアバンクスが

就任し、いわゆるアカデミー賞が設けられた年である。また、*The Jazz Singer* が初めてトーキーで上演され、Robert Sherwood がサイレント時代の終焉を宣言している。

Walt にとっての一番の関心事も、やはり20年代という時代を如実に反映しており、映画と野球になっている。

映画については、Witherspoon 夫人に頻繁に連れて行ってもらっただけでなく、Walt the Wonder Boy として空中浮揚の公演を終えた後、最新の映画を見に行くエピソードが描かれている。公演旅行について語る際にも、いかにも映画好きらしく次々と街街を訪ねていく目まぐるしい日程を映画の手法を用いて次のように紹介を試みている。

If this were a movie, here's where the calendar pages would start flying off the wall. We'd see them fluttering against a background of country roads and tumbleweed, and then the names of those towns would flash by as we followed the progress of the black Ford across a map of eastern Oklahoma. The music would be jaunty and full of bounce, a syncopated chug-chug to ape the noise of ringing cash registers. Shot would follow shot, each one melting into the other. Bushel baskets brimming with coins, roadside bungalows, clapping hands and stomping feet, open mouths, bug-eyed faces turned to the sky. The whole sequence would take about ten seconds, and by the time it was over, the story of that month would be known to every person in the theatre. Ah, the old Hollywood razzmatazz. (122)

以上のように、映画が生活の隅々にまで浸透しているといえよう。

b 野球

また1927年をスポーツ界で見ると、ボクシングではイタリア系の移民の Jack Dempsey がヘビー級の世界チャンピオン (1919-26) になり、またフットボールでは、シカゴベアーズのハロルド・レッド・グレンジ等の活躍が目覚しかったが、中でも1927年に60本のホームランを打ち、記録を樹立した George Herman Babe Ruth の野球がアメリカ国民の圧倒的な人気を博していた。デンプシーが移民であったように、ベイブ・ルースもアイルランド系の移民の子で、貧しいカトリック系の家に生まれている。ある意味で、スポーツは WASP 以外の貧乏人が成功しヒーローとなりうる数少ない場を与えてくれる世界でもあったのである。

Walt 自身はプレーすることはなかったが、映画以上に夢中になり、身の破滅の原因とすら成りえたのがこの野球である。野球は言ってみればアメリカの国技であり、プレーするスポーツとしてだけでなくショーとしてもアメリカでは最も古く人気があるスポーツである。

Walt にとって新しく家族となった3人は、野球のことは全くわからず、「唯一興味のある話題であった我愛するカーディナルズ」(14) のことを話せる相手もないばかりか、空中浮揚の訓練のため、カーディナルズは無論のこと、マイナーリーグの地方球場にすら連れて行って

もらえず、このことが大きな不満となっていた。

1926年、天候不順による不作のために世の中に不穏な空気が流れ始めたとき、Master Yehudi からカーディナルズがワールドシリーズで優勝したことを教えられる。"I'm with those Redbirds till the end of time." (54) と思入れのあるチームの優勝は、彼にとっても「ランドマーク」(51) だったとあるように、この年の12月に初めて彼は体が浮くのを経験している。このようにチームの浮き沈みに Walt 自身が影響を受けるようになるまで結びつきが強いのである。「オムツがとれない頃から」カーディナルズファンという Walt は、空中浮遊の公演で忙しくアメリカの各地を巡っていた間も、飛べなくなり Yehudi にも死なれ、浮浪者に身をやつして復讐の為に伯父の Slim を捜している間も、チームの試合はフォローし、特に1930年と31年のリーグ優勝には励まされたといっている。"As long as the Cards were winning, something was right with the world, and it wasn't possible to fall into total despair." (243) とまで語っているように、野球は彼に希望と生きる力を与えてくれるものなのである。

彼はカーディナルズの中でも、花形投手であったばかりでなく、気さくでいきのよい話術で人々を魅了していた Dizzy Dean を愛するようになる。そしてそれがシカゴで *Mr. Vertigo* というナイトクラブのオーナーになるまで成功していた彼を、"Humpty Dumpty" (241) のごとく絶頂から転がり落とさせる原因ともなるのである。34年に投手としての絶頂期を迎えた Dizzy だが、度重なるけがや故障もあって、徐々に落ち目になり、38年にはトレードで出され、シカゴカブスへ移籍する。Walt は彼がまだカーディナルズの開幕投手だった35年に既に、「彼の周りに暗雲が立ち込め始めた」(245) のを感じ、更に「彼の浮き沈みが、個人的な形で僕に深く影響し始めた」(245) とも感じている。気持ちの上で、あまりにも彼と深い関わりが出来てしまった（店の名前の *Vertigo* も彼の名前の Dizzy も共に眩暈を意味する共通点があると自分で指摘している）Walt は、彼の没落に、とりわけ華々しい過去を持つヒーローが、潔く引退せず、醜態を曝け出しながら球場に踏みとどまっていることに我慢できなくなる。その結果、クラブの常連となっていた Dizzy を誘い出し、無理やり自殺させるという形で、幕を引かせようと考えついたのだ。この計画はもちろん Dizzy に抵抗され、彼は警察に逮捕され、クラブも手放さざるを得なくなり再びどん底の生活が始まるのである。

ここで注目すべきなのは、Dizzy Dean が実在の選手であり、Walt との一件を除けば、彼が、"The Hall of Fame"という殿堂入りを果たした名選手で、彼の華やかで言いたい放題というキャラクターがそのまま描かれている点である。彼のカーディナルズの在籍期間やシカゴカブスへのトレードによる放出時期といった個人的な事実や、カーディナルズの優勝年がそのまま小説の中で再現されており、小説にリアリティを付与している。

c リンドバーグ

ニューヒーローの誕生の中でも最も華々しかったのは、1927年に単独大西洋無着陸横断に成功した Charles A Lindbergh である。彼は中西部ミネソタ州の出身で、1919年にニューヨークの資産家が、ニューヨーク・パリ間の初飛行に成功した者に、2万5千ドルの賞金を出したことに刺激されて、単独飛行を思いつく。セントルイスの若手実業家たちの支援を受けて、"the Spirit of St Louise"と名づけられた飛行機の製作にも自ら携わる。サンディエゴで製作された飛行機は、セントルイス経由でニューヨークへ運ばれ、1927年5月20日朝、ルーズベルト空港を飛び立ち、33時間かけて21日夜パリに無事到着する。人々はヒーローを熱烈な歓迎で出迎えたのみならず、英仏両国から栄誉や勲章が与えられる。Coolidge 大統領（1923-29）差し向けの旗艦でワシントンに帰ると、更に熱狂的な出迎えを受ける。これはヒーローに対する敬意のみならず、Hughes 国務長官も述べているように、「われわれを自由な高い空へと誘ってくれた」ことにあるだろう。単に鳥のように自由に空を飛ぶことに対する憧れの念ばかりではなく、そこには自然の重力に逆らい機械を自由に操るという人間の、自然とテクノロジーに対する勝利のメッセージが含まれていたのである。それというのも1920年代はまた、マシンエイジとも言われ、1921年には、カレル・チャップックが、R・U・R という戯曲の中で、ロボットが人間に対して叛乱を起こし、人間が死滅するに至るというストーリーを描き、また、Charlie Chaplin も映画 *Modern Times* の中で、人間が機械に支配される様を、滑稽にしかもシリアスに描いている。そのように機械文明に対する危機感があった時代であったため、機械を自由に駆使し支配し得た Lindbergh の快挙は余計光ったのである。

さてここでふたたび、*Mr. Vertigo* に話を戻し、小説の書き出しに注目してみよう。

I was twelve years old the first time I walked on water. The man in the black clothes taught me how to do it, and I'm not going to pretend I learned that trick overnight. Master Yehudi found me when I was nine, an orphan boy begging nickels on the streets of Saint Louis, and he worked with me steadily for three years before he let me show my stuff in public. That was in 1927, the year of Babe Ruth and Charles Lindbergh, the precise year when night began to fall on the world forever. I kept it up until a few days before the October crash, and what I did was greater than anything those two gents could have dreamed of. I did what no American had done before me, what no one has ever done since. (3)

Walt は1927年に空を飛べたのであるが、そのことを Babe Ruth や Charles Lindbergh の偉業と並べて称えるどころか、「二人が夢想だにしなかったすごいことをやってのけた」と自賛している。それは単にアメリカ人が後にも先にもなしえなかったというだけでなく、「水の上を歩く」と言う表現から、自らをキリストに擬えていることがわかる。事実「イエスと同じスキ

ルで水の上を歩いた」(86)と明記されている箇所もある。この箇所は、Lindberghの成功をWitherspoon夫人から知らされた場面であり、自分がはじめて空中に浮かぶことに成功した時期と、Lindberghの成功が同一時期であることに意義を見出し二人をコロンブスとマゼランに擬えている。

I've always found it strange that Lindbergh's stunt coincided so exactly with my own efforts, that at the precise moment he was making his way across the ocean, I was traversing my little pond in Kansas—the two of us in the air together, each one accomplishing his feat at the same time. It was as if the sky had suddenly opened itself up to man, and we were the first pioneers, the Columbus and Magellan of human flight. I didn't know the Lone Eagle from a hole in the wall, but I felt liked to him after that, as if we shared some dark fraternal bond. It couldn't have been a coincidence that his plane was called the *Spirit of St Louis*. That was my town, too, the town of champions and twentieth-century heroes, and without even knowing it, Lindbergh had named his plane in my honor. (86-7)

更にWaltは「リンドバーグより一歩抜きんで行きたい」(87)と考える。つまり「彼が機械で行ったことを、自分自身の体を使って行う」のだと。確かに自分の意のままに操ったとはいえ、機械に頼らざるを得なかったLindberghよりも、全く機械を使用せず重量に逆らったという点で上を行っている。確かにここには自然とテクノロジーの克服という観点からみれば究極の姿があるといえよう。

3 禁酒法とアル・カポネの時代

第一次世界大戦中の食料不足や戦意向上などの必要性もあって、戦時中に飲酒を禁ずる機運が高まっていたが、1919年に禁酒法が制定され、1920年からは酒類を飲むことも造る事も禁止され、1933年にルーズベルト大統領によってこの法律が撤回されるまで続いた。これが禁酒法の時代である。人類が古来愛飲してきた酒を飲むことを禁じたことは、かなり無理があったようで、飲酒は表面的には消えたものの、社会の裏面では相変わらず飲まれ続ける。例えばアルコールを薬として医師に処方してもらい、薬局で購入すれば飲むことができるなど滑稽な状況を醸し出していたようである。「処方箋」を得て合法的に酒を飲むことができない人たちは、地下クラブで酒を飲んだ。大方の地下クラブは換気が悪い上、人込みで息苦しく下品で騒々しい安酒を飲ませる店であったが、警察の手入れさえ逃れれば、かなりの儲けになったようである。

ここに目をつけたのが、いわゆるギャングたちである。なかでもアル・カポネ(Alphonso Capone)は、ニューヨークで名をあげた後、1920年にシカゴのイタリア系ギャングの親分で

ある、ジョン・トリオにスカウトされ、シカゴへ移り、一万軒もの密造酒場、いわゆる"speak easy"を配下に治める密造酒販売者 (bootlegger) として成功を収める。彼はこの他にも、組織的売春を行い、競馬や競輪を組織化し、また政治資金を供与して買収を行うなどしている。彼は冷血なギャングとして人々を震え上がらせる一方で、イタリア系の移民たちにとっては、頼りになるパドローネでもあった。彼は、「バケツ3杯の石炭」に象徴されるように、貧しいイタリア系移民たちの生活の面倒を、入国から住居・就職や結婚相手の世話に至るまでとことんみたのである。

ギャングには彼のようなイタリア系のほかに、アイルランド系やユダヤ系が多かった。このことは、WASP が豊かな社会階級に属していた人が多かったのに対して、カトリック教徒のイタリア系やアイルランド系、ユダヤ系の人々は、スラムに住み着いて（ニューヨークでいえば、Lower Eastside のユダヤ人街やイタリア人街）、工場労働に従事するものが多かったためであろう。いわゆる「カトリック教徒、ユダヤ人、あるいは犬は立ち入り禁止」と言う標語は単に店や特定の地域から彼らマイノリティを追い払ったのみならず、富をもたらす仕事も奪ったのである。堅気の仕事では富を築けないとわかれば、後は地下世界で成功し富を築くしかなかったわけである。

I から IV で構成されている *Mr. Vertigo* の III の部分の時代は、ルーズベルトの大統領就任式の2ヶ月前とされており、禁酒法が撤廃される直前に設定されている。Walt は Yehudi を撃ち殺し金を奪った Slim 伯父に復讐すべく、状況判断の下手な彼のことからもう先のない密造酒関係の仕事についているだろうと見当をつけて、中西部中を探し回っている。結局、シカゴから南へ下ったロックフォードの密造酒倉庫で番をしていた伯父を突き止めて毒杯をあおがせて復讐を遂げるが、伯父を雇っていた、「ミスター・シカゴで、ボス O'Malley の右腕」(224) の Bingo Walsh に捕まってしまう。その結果 Walt は Bingo の下で新しいキャリアを踏み出すことになる。今度はアンダーグラウンドの世界でのキャリアである。アイルランド系と思われる O'Malley は、Al Capone のように、密造酒のほかにも、賭博場・ナンバーズ・売春宿・用心棒・スロットマシンなど幅広く手を出し、Bingo がそれを仕切っていた。Walt は Bingo の使い走りからスタートし、所場代の取り立て・ナンバーズ担当・場外馬券担当・馬券売り場のマネージャーと徐々に地下世界の梯子を昇っていく。しかしこのような生き方が誤ったものであることを彼自身熟知していたし、Bingo たちには一切明かしていない過去の自分こそ最良の自分であると認識している。

So it went. I made a home for myself in the organization, and I never felt the smallest pang about throwing in my lot with the bad guys. I saw myself as one of them, I stood for what they stood for, and I never breathed a word to anyone about my past: not to Bingo, not to the girls I slept with, not to anyone. As long as I didn't dwell on the old

days, I could deceive myself into thinking I had a future. It hurt too much to look back, so I kept my eyes fixed in front of me, and every time I took another step forward, I drifted farther away from the person I'd been with Master Yehudi. The best part of me was lying under the ground with him in the California desert. (228)

そのかつての最良の自分に対する思いもあって、その時の名前と同じ Wonder Boy という馬に金を賭けて大金を手に入れる。彼はこのお金を元手に独立して高級ナイトクラブを開く。この華やかで上品と下品が混ざり合っている店の様子や、紳士的だが、アンダーグラウンドの世界とのつながりを彷彿させる店主である Walt の雰囲気は、1920年代という光と陰を併せ持つ時代が醸し出していた雰囲気を如実に反映させていると言えるだろう。

むすび

以上、1920年代を映す鏡として、Paul Auster の *Mr. Vertigo* について述べてきた。

アメリカ文学史上では、1920年代を描いた作家として、文字通り、*Tales of the Jazz Age* (1922) という作品を書いた Francis Scott Fitzgerald がいる。時代の雰囲気を映し出しているという観点から言えば、彼の代表作であり、同時代を模写した *The Great Gatsby* (1925) と較べてみて、Auster が描く *Mr. Vertigo* も決して見劣りすることがない。時代を描くポイントの類似も数多く見られる。そればかりか *Mr. Vertigo* でも主人公の Walt の出身地及び小説の舞台はほとんどが中西部に設定されていたが、Fitzgerald 自身、ミネソタの出身であり、語り手の Nick Carraways を始め、皆中西部の出身であるというように地理的設定の共通点さえ見られる。

また作品の中には人種差別的な要素が散見される点も同様である。白人富裕階級に属する Tom Buchanan の口を借りて、"It's up to us, who are the dominant race, to watch out or these other races will have control of things." (19) と述べ、当時の人種差別的な時代背景が語られる。この他にも、ユダヤ人はギャングか女たらしとして描かれ、また、高級車に乗った金持ちの黒人たちの鼻持ちならない様子を描くなど「黒人」への侮蔑的な言葉や態度が散見される。禁酒法の時代を象徴するように、鍵をかけたたんすの扉を開けて、中に隠しておいたウィスキーのビンを取り出す描写があるかと思えば、Gatsby 邸で夜な夜な繰り広げられるパーティに群がり、酒を浴びるほど飲み、乱気騒ぎを楽しむ人々の様子が描かれ、時代の極端な両面が表現されている。また、Gatsby は bootlegger とか人を殺したこともある人間と噂されている。Poor Richardsのごとく勤勉で清貧であった Gats が、Daisy という理想の女性に恋をし、贅沢で金を必要とする彼女と結ばれんがために、手段を選ばず富を築き Gatsby に変身した訳だが、Gatsby としての彼は、出生や学歴、職業に至るまで、曖昧模糊とした嘘で塗り固められた人生であやどられることになる。そればかりではなく、時折かかってくる電話

の応対などから、彼がアンダーワールドとつながりがあることが示唆されている。彼の友人に、Meyer Wolfshierm というユダヤ人がいるが、彼はギャンブラーであり、それも1919年のワールドシリーズを買収し、いかさまを仕込んだ大物とされている。このことも彼とギャングの世界の深いつながりを示唆するものであろう。主要人物ではないが、作品の中には、賭博で全部擦ってしまう人や Walt のごとく派手に女性達と遊ぶ男性の姿が描写されている。

以上のように、1920年代は、Jazz Age の喧騒とフラッパーたちの華やぎがあり、映画界やスポーツ界を始め新しいヒーローが次々と誕生する明の時代の様相と、天候や景気の激しい変動を背景に人々の間に不安が広がり、寛容さを奪った結果、人種差別がひどくなり、また禁酒法ができた結果、かえってギャングなど地下世界の活性化を促すなど暗の様相も強まった時代である。また、株で大儲けした成金たちが、1929年の暗黒の木曜日で全てを失ったように、成功と失墜が隣合わせであった時代ともいえよう。Fitzgerald の *Gatsby* は、貧しい家庭に生まれ、軍人として成功し大佐にまで出世するが、戦争が終わってしまえばその地位は全く役に立たず、社会の底辺に逆戻り。その為今度は手段を選ばず、裏舞台でのし上っていき、巨万の富を手に入れるが、既に他の男性と結婚していた意中の人を取り戻すことはできなかったばかりか、誤解から射殺されてしまうという悲惨な最期を遂げる。

Auster の Walt は、スラムの孤児で食うや食わずの生活を送っていたところを Yehudi に出され、飛翔の天才 Walt the Wonder Boy として成功するが、重力の法則に逆らった付けが想像を絶する激しい頭痛という形で表れ、飛翔家としての人生は終わる。Yehudi と共にハリウッドへ行き映画の世界で成功を収めようとするが、それも Yehudi の死で立ち消えになると、Walt も *Gatsby* と同様に社会の底辺から這い上がる手段として地下世界での仕事を選りギャングの手下として申し上っていくのである。しかしながら、Walt の場合もせつかく *Mr. Vertigo* の店主として富を手に入れながら、失脚し店を含め全てを手放さざるを得なくなる。このように *Gatsby* や Walt の人生も成功と失墜が繰り返されている。振り返って実人生を見ると、人生は様々な要素に彩られているのであり、明と暗、成功と失墜といった一見相反する要素が同居しているのがむしろ当たり前のことである。こう考えてみると、時代の特質として明暗入り混じった要素がみられた1920年代は、人生を描く背景として実に相応しい時代であるといえないだろうか。しかもその20年代は、この作品が書かれた1990年代と社会の保守化と不寛容精神の広がり等の点で類似点が多いのである。一見すると異質な印象を与える *Mr. Vertigo* の時代設定にも、浮沈に満ちた人生と現代を描くことに長けた Auster の深い配慮が配られているといえないだろうか。

Works Cited

- Auster, Paul. *Mr. Vertigo* London: Faber and Faber, 1994.
---. *Leviathan* New York: Penguin Books, 1992.
---. *The Art of Hunger* New York: Penguin Books, 1997.
Bradbury, Malcolm *The Modern American Novel* Oxford: Oxford University Press, 1984.
Fitzgerald, F. Scott *The Great Gatsby* 1926 New York: Penguin Books, 1978.
Friedman, Lester D. *The Jewish Image in American Film* Secaucus: Citadel Press, 1987.
Springer, Carsten *A Paul Auster Sourcebook* Frankfurt am Main: Peter Lang, 2001.
秋元孝文 「重力の孤児」 『アメリカ文学研究』第36号 1999.
猿谷 要 『物語アメリカの歴史』中央公論社 1991.
林敏 彦 『大恐慌のアメリカ』岩波新書 1988.
松尾式之 『アメリカン ヒーロー』講談社現代新書 1993.
メアリ・バス・ノートン他 本田創造監訳 『アメリカの歴史4——アメリカ社会と第一次世界大戦』三省堂
1996.